

大拙は『日本的靈性』の中で、法然と親鸞の二人を一人格として見る見方を提言しているが、これを借りて、西田と大拙の二人を重ねて相互の相補解釈を試みることも意義あることではないかと思う。二人の思索の跡を辿るというよりも、二人が共に求めた処を我々も求めることが大切ではなかろうか。伝記的・思索的側面でも、西田哲学の開始と終局に大拙との深い共振を見ることが可能である。（明治 35 年の書簡応答や最後の宗教論の成立等。）

西田の最初の著作『善の研究』自体が、「純粹經驗」の独自の重層連関「思惟・意志・直観」をその根底へと帰り行く思索の道であると同時に、「哲学の終結」としての「宗教」を目指す「己事究明」の道でもある。これを、宗教が哲学の対象となる通常の「宗教哲学」ではなく、宗教が哲学の「根底にして終局」となる独特の構造を孕む「宗教 / 哲学」とでも記したい。哲学の道にして宗教の道、その際の重層性の中心に位置する「意志の要求」が独自の重みを帯びて、「宗教的要求」（宗教心）となり、哲学の軸にして地盤になる。「宗教と哲学」の関係は、西田最後の宗教論においても「宗教は心靈上の事実」（11-371）であり、「哲学はあくまで説明」であり、双方の乖離を架橋するものこそが「宗教心」とされ、その成立構造の究明が主題となっている。この発想は大拙とも深く一致する。大拙も「宗教は原文なり、哲学は批評なり」（23-102『新宗教論』）と述べ、「衆生誓願度を以て安心となす」（N17-51,S36-209）姿勢は、晩年の「真空妙用」の「大悲」の強調まで一貫しており、西田と深く共振する「悲願」（菩薩道）への根本関心である。

「純粹經驗・自覚・場所」という西田前期の転回は、実は純粹經驗の重層構造「思惟・意志・直観」の根底への帰行の大きな反復運動でもある。「見るものなくして見る」直観の底の「無の場所」の脱自性に触れたならば、すべて有るものは「表現の世界」となる。西田哲学を単純化して言えば、主著の表題『働くものから見るものへ』は直観の根底への帰行としての「脱自」になり、これを翻して再び『見るものから働くものへ』と回転するならば、これが西田独自の「表現」思想にして「行為的自己の立場」であり、後期の「世界の自己表現」思想に通じる。場所論三部作は、「無源の水を尋窮すれば、源窮まって、水窮まらず」（cf.6-67）の寒山詩を借りるならば、「源」（無の場所）から「水」（世界）への転回を予想する。

このような「純粹經驗・自覚・場所」の展開から「行為的自己の立場」を経て最後の「絶対矛盾的自己同一」までの西田の思索に深く響き合う大拙の独自の思索世界、「禅經驗・禅意識・禅思想」（「禅境・禅意・禅理」15-259）の構造連関など、「禅行為」としての「即非の論理」を中心に「人」（にん）思想の成立に向けて、その一端を考察してみたい。

尚、意外に注目されないが、大拙が禅に関する膨大な著作を日本語で書いたのは、妻のピアトリスが亡くなった 1939 年（昭和 14 年）大拙 69 歳以後のことである。禅関係のみの著作 30 冊程を挙げてみたい。現在の全集は著作連関が分かり難く、整理作業が必要であろう。今回は、「行の論理」（14-98）としての「即非の論理」にのみ考察を絞りたい。